

「核時代とキリスト教―核をめぐるキリスト教の言説についての一考察―」¹

澤村 雅史

Nuclear Age and Christianity -A study on the Christian discourses about Nuclear Weapon and Nuclear Power-

SAWAMURA Masashi

Abstract

This study picks up to criticize several characteristic discourses made from the aspect of Christian ethics on the drop of A-Bomb on Hiroshima and Nagasaki, “peaceful” use of nuclear power, and nuclear deterrence as well, trying to find how and why those discourses are different and sometimes even contradictory. Through the process, this study aims to contribute to establish a viewpoint of Christian Ethics in the Nuclear Age.

Key words : 被爆の実相、原子爆弾、核の平和利用、浦上燔祭説、良心の「立ち入り禁止区域」

1. はじめに～「被爆の実相」が指し示すもの

「被爆の実相」という言葉がある。2016年5月に現役としては初となるアメリカ大統領の広島訪問が実現したが、このことを指して日本の首相は広島、長崎での平和式典に際し、「核兵器を使用した唯一の国の大統領が、被爆の実相に触れ、被爆者の方々の前で、核兵器のない世界を追求する、そして、核を保有する国々に対して、その勇気を持とうと、力強く呼びかけました」（2016年8月6日「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式あいさつ」）、また「核兵器を使用した唯一の国の大統領が、被爆の実相に触れ、被爆者の方々の前で、核兵器のない世界を追求する、そして、核を保有する国々に対して、その勇気を持とうと、力強く呼びかけました」（2016年8月9日「長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典あいさつ」）と述べ、いずれにおいても、原爆投下国の大統領が「被爆の実相」に触れたことを高く評価している。しかし実際には、アメリカ大統領が広島に滞在した時間は1時間足らずとわずかであり、なかでも広島平和記念資料館の展示を見学した時間は10分程度²であることから、果たして「被爆の実相」に触れたといえるのか、という批判もある³。

何をもって「被爆の実相」に触れたといえるのか、という問題は、何をもって「被爆の実相」と呼ぶか、という問題と不可分である。「実相」とは、「実際のありさま」を指す言葉であるが、「被爆の実相」すなわち「被爆の実際のありさま」が何を指すのかについては、多様な理解が存在する。被爆遺物、被爆遺構、当時の写真などの資料を「客観的に」提示することにより示されうるもの、という理解もあれば、被爆者の体験に基づく証言こそが実相をもっとも伝える、という理解もある⁴。

また、そもそも「被爆の実相」という言葉は、多様な内容を含みうるがゆえに、安易にその言葉を用いることは、かえってその言葉が指し示す事柄の本質を覆い隠してしまい、その言葉の内実をむしろ空虚化させてしまうことを、筆者は詩人アーサー・ビナードの指摘により、気付かされた。

ビナードは、アメリカ大統領の演説の冒頭の言葉である” Seventy-one years ago, on a bright cloudless morning, death fell from the sky and the world was changed.”(71年前、明るく雲一つない朝に、死が空から降ってきた、そして世界は変えられた) という言葉に対し、「広島の人たちは広島という言葉で言う、『原爆は落とさんや落ちてこん』」と、「原爆の図」で知られる画家、丸木位里の母スマの言葉に寄せて批判する。どのような言葉を選んで用いるか、ということは、その言葉を用いた主体の、表現しようとする対象や内容との距離感や向き合い方を、かくも明らかにしてしまうのである。

2. あなたはそれを何と呼ぶか？

1) 「ピカドン」と「原子爆弾」

ビナードは、アメリカで受けた教育においては、広島と長崎に投下された兵器は「原子爆弾」(Atomic Bomb) と、「核兵器」(Nuclear Weapon) と呼ばれていたが、これらは、「落とす側」の立場からの呼称であることを、ある被爆証言によって気づかされた、という。「平和記念資料館では、1945年8月6日、ウランの核分裂の連鎖反応にさらされた人の話を初めてきいて、そこで『ピカドン』を覚えました。体験を語ってくださった女性は、『原子爆弾』や『原爆』ではなく、『核兵器』という言葉も使いませんでした。広島上空で引き起こされた現象を『ピカドン』と呼んだのです。ぼくにとっては、ついぞきいたことのない単語でした。けれど、その意味は瞬時に伝わってきたのです」⁵ という彼の告白には、「ピカドン」という言葉によって受けた衝撃が素直に表現されている。ビナードは、その「ピカドン」という言葉を覚えて、使ってみることで、自分の「立ち位置」がすっかり変わったことを実感したという。「『核兵器』(Nuclear Weapon) も『原子爆弾』(Atomic Bomb) も、核開発を進めた人たちが作った呼び名です。落とす側、核分裂を利用する側の視点と都合が最初から組み込まれています。他人事としてとらえる言葉で、たとえば『エノラ・ゲイ』の爆撃機からキノコ雲を見下ろす印象です。それに対して『ピカドン』は、広島生活者が自らの焼かれた皮膚とずたずたに切られたDNAをもとに、日本語を鋭く豊かに響かせて、生きた言語感覚で本質をつかんだのです。〔中略〕英語にないその言葉を使うと、68年前の長崎に、広島に、ぼくらは立たされます」⁶ と、彼は語る。

2) 広島、ヒロシマ／HIROSHIMA、廣島

原爆投下との関連で広島という都市名に言及する場合に、カタカナ表記の「ヒロシマ」や、ローマ字表記の“HIROSHIMA” が用いられることがある⁷。このことについて、歴史学者である宇吹暁は「ヒロシマ」とは「社会化された被爆体験」を示す呼称であると定義している。宇吹が代表をつとめる「紙碑」・原爆手記総目録編纂委員会が運営するウェブサイト「ヒロシマ通信」⁸ にまとめられた原爆文献リストの中で、タイトルに「ヒロシマ」を冠した文献として最初に現れるのは、ジアン・ハーセイ著、江原武訳『ヒロシマと原爆』(1947年)である。これは、1946年に『ニューヨーカー』誌にジョン・ハーシー記者が発表して世界的な反響を呼び、のちに書籍化された記事の邦訳版であり、アルゼンチンのビジャヌエバ印刷舎より出版されたものである。ハーシーの記事以降、「HIROSHIMA／ヒロシマ」の呼称は、原爆投下地の固有名詞であることを超えて、宇吹が指摘するように、メッセージ性をもった呼称として定着していった⁹。

また、広島の表記に関して、原爆投下前の軍都としての広島の性格を表現する場合に、あえて旧字体の「廣島」が用いられることがある。日清戦争時の1894年には大本営が置かれ、軍本部(第二総軍司令部など)、軍港(宇品港)、軍用鉄道(宇品線)、兵站の拠点(陸軍被服支廠等)が整備、機能するなど、戦前の広島の発展は軍事都市としての性格と不可分のものであった。広島が原爆投下の目標とされた理由の一つは、このような軍事拠点としての重要性にあったとされるが¹⁰、これに対して、「軍都としての廣島を目標にしたわけではなく、原子爆弾の威力、効果、影響を調べるうえで条件が整っている都市として広島が目標に選ばれた」¹¹ という指摘もある。いずれにせよ、原爆投下の背景としての戦争における、日本の加害性を認識するために軍都「廣島」という表記を用いることの意義は大きい¹²。

3. キリスト教はそれを何と呼ぶか？

詩人・ビナードが指摘するように、言葉がそれを用いた主体の「立ち位置」を暴露してしまうのだとして、それでは果たしてキリスト教は「ピカドン」／「原子爆弾」を、どのように「名づけ」¹³て来たのであろうか。ここではいくつかの事例に目をとめてみたい。

1) 「任務」～従軍牧師・司祭の祈り

日本への原爆投下のために編成されたアメリカ陸軍第 509 混成飛行隊に随行していたルター派の従軍チャプレン、ウィリアム・ダウニー大尉は、B29 エノラ・ゲイが広島へ飛び立つ直前、機長に乞われて「全能の父なる神よ。(中略)彼らが命じられた飛行任務を行うとき、彼らをお守りくださるように祈ります」と祈りをささげたことが知られている¹⁴。長崎へ出撃したボックスカーの搭乗員たちのためには、テナン島の野戦病院に配属されていたカトリック司祭、ジョージ・ザベルカが祝福を祈った。彼らにとっては、原爆投下は「飛行任務」であり、その成功のための祈りは彼ら自身の「任務」であった¹⁵。

2) 「悩み」～米国クリスチャンの抵抗

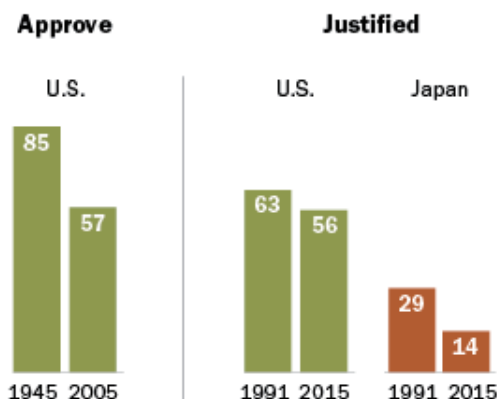
米国キリスト教連合協議会事務局長サミュエル・コヴァートは、1945 年 8 月 9 日付のハリー・トルーマン大統領宛の電文で、冒頭から「多くのクリスチャンが日本の都市への原爆投下に著しく心をかき乱されている ("Many Christians deeply disturbed over use of Atomic Bombs against Japanese cities.")」と非難し、その理由として「必然的に引き起こされる無差別の破壊的影響、および人類の未来に向けて極めて危険な先例をつくることになる」と述べている。

これに対し、トルーマンは 8 月 11 日付の返電にて、「私ほど原爆使用について悩んだ (disturbed) ものはいないが、日本人が真珠湾を奇襲し、さらに (米国人) 捕虜の殺害に憤りを覚えている (disturbed)。日本人にわかると思われる言葉は爆撃だけだ。けだものは、けだものらしく扱わねばならない。極めて残念なことだがそれが真実である」¹⁶として不快感を表している。トルーマンの電文は、原爆投下が正当な報復行為であり、また日本に降伏を迫る手段(「爆撃という言葉」)であるという認識を示している。原爆投下が、戦争終結を早め、日本「本土」での地上戦による両国兵士および日本の民間人にさらなる流血が広がるのを防いだ、という見解は、現在に至るまでアメリカ政府が繰り返してきたものであり、Pew Research Center が 2015 年に行った調査(図1)¹⁷でも 56%が「正しかった」と答えるアメリカの世論形成の基盤にあると考えられる。アメリカに限らず日本でも、1945 年 8 月 12 日にはすでに、当時の海軍大臣米内光政が「私は言葉は不適當と思うが原子爆弾やソ連の参戦は或る意味では天佑だ。国内情勢で戦を止めると云うことを出さなくても済む」と発言している。2007 年には当時、長崎選出の国会議員として防衛大臣であった久間章生が「あれで戦争が終わったんだという頭の整理で今、しょうがないなというふうに思っている」との発言が、原爆投下を容認していると物議を醸し、辞任に追い込まれた。

しかし、原爆投下が早期の戦争終結に益したという見解は、「原爆神話」とでも呼ぶべき、根拠のない説であり、むしろ戦後の世界に向けてアメリカの核の威力を誇示する政治目的が原爆投下の根底にあった、という指摘もある¹⁸。また、山に囲まれたデルタ平野という地形が原爆の威力測定に有利と考えられること、爆撃禁止による市

Declining Support in Both the U.S. and Japan for America's Bombing of Hiroshima and Nagasaki

% approve of or think the use of atomic bombs on Japanese cities in 1945 was justified



Source: Approval data from Gallup; 1991 data from Detroit Free Press survey, 2015 from Pew Research Center survey.

PEW RESEARCH CENTER

図 1 ヒロシマと長崎への原爆投下の是非についてのアメリカ世論調査

街の温存、夜間の繰り返しの空襲警報、8時15分という投下時間、そして、戦後のABCC（原爆傷害調査委員会。現在は日米共同出資運営による財団法人放射線影響研究所へと改組）による調査のあり方などは、原爆投下が新型兵器による人体実験の性格をも持っていたことを伺わせる。

3) 核による「癒し」

先述の、原爆投下を命じたアメリカ大統領トルーマンは、また「我々はそれ（原子爆弾）が敵の方ではなく、我々の側にもたらされたことを神に感謝する。そして、神がそれを神のやり方と目的において用いるよう我々を導いてくださるようにと祈る」（ポツダム会議についての米国民へのラジオレポートより）¹⁹と述べてもいる。そして、広島女学院第5代院長をつとめた松本卓夫が、1964年に第1回世界平和研究使節団団長として渡米した際に面会した際も、初の被爆者との直接面談であったにもかかわらず、謝罪どころか「その目的は、双方で50万人の死者やさらに多くの負傷者を出さずに戦争を終結させることだった」²⁰と原爆投下を正当化する発言を繰り返すのみであった。

その一方で、前述のコヴァートらのように、原爆投下に良心の呵責を覚える者や、のちのダウニー牧師やザベルカ司祭のように、原爆投下に信仰的罪責感を覚え、積極的に平和運動や、ヒロシマ・ナガサキの被爆者支援や戦後復興に尽力する動きも見られた。²¹

一例としては、前述のジョン・ハーシーの「ヒロシマ」にも取り上げられた谷本清牧師（当時の広島流川教会牧師）とともに「精神養子運動」を広めたジャーナリストのノーマン・カズンズらの働きを、アメリカの多くの教会が支えた。

このようなキリスト教的隣人愛が、戦後のアメリカの政治状況と結びついて、奇怪なかたちで現れたケースがある。それは「広島での原発建設計画」である。

1949年に当時のソビエト連邦が核兵器の開発に成功して以降、アメリカとソ連の間には核開発競争が始まり、「冷戦」と呼ばれる世界情勢が生み出された。このことを背景に、アメリカ大統領アイゼンハワーは、1953年に国連総会における演説で「平和のための原子力」(Atoms for Peace)を提唱し、核戦争の抑止に向けてのメッセージの発信と、自国の核開発の正当化を試みた。この提言を受けるようにして、米原子力委員会のトーマス・マレー委員は、米国の援助によって「日本に原子力発電所を作ることは劇的でキリスト教徒的な行為であり、こうすることで我々は広島、長崎の惨劇の記憶を乗り越えることが出来るだろう」と述べたという²²。マレーに賛同してシドニー・イエーツ下院議員（民主党、イリノイ州選出）は1955年に、広島に日米合同の工業用発電炉を建設する案を米議会下院に提出した。その内容は、「日本の場合、戦争が産み出した原子力が日本人に与えた焼印の傷を消し去ることで役立ちたいという我々の願い、そのような友情を築く上で、原子力を平和という形で利用し、自然資源が極めて少ない彼らを助けるという形での奇跡を可能にするほど現実的なやり方はない」また、「（その意味で、）原子力の平和利用に向けての原子炉を、原爆による破壊を初めて受けた場所に建設することは極めて適切である」²³というものである。

アイゼンハワー大統領は核の「平和利用」の推進を提唱する一方、より威力の大きい水素爆弾を含む核実験をも加速させ、その結果として日本のマグロ漁船が水爆実験に巻き込まれ被爆するという「第五福竜丸事件」が1954年3月に起きることとなった。この事件は日本国内における反核運動の過熱と拡大を引き起こし、同年8月6日には原爆・水爆禁止広島市民平和大会が行われることとなった。マレーとイエーツの「広島に原発を」という提案は、こういった状況に呼応したものと考えられるが、彼らが被爆のトラウマに対する「癒し」を広島原発建設の理由に挙げ²⁴、マレーはさらにそれがキリスト教的隣人愛の発露であるとまで述べていることは興味深い²⁵。

その後、広島原発の建設計画は立ち消えとなるが、1956年には前年に開館したばかりの「広島平和会館原爆記念陳列館（現・広島平和記念資料館）」を会場として「原子力平和利用博覧会」が開かれた。「被爆の実相」を伝える展示物は館内から一掃され、かわりに核燃料を運搬する「マジックハンド」や、原子炉の実物大模型などが展示され、盛況を呈したという。以後、1967年の展示見直しまで原子力の平和利用に関する展示は資料館の一角を占め、また、資料館の設置条例にも目的として「原子力の平和利用に関する資料の収集、展示」が謳われたままとになっていたという²⁶。このように、日米の原子力政策²⁷によって被爆地ヒロシマは、「原子力の平和利用」のアイコンとしての役割を纏わされようとしてきたのである。

4) 核兵器と「正戦」

キリスト教による原子力の「免罪」は、一方では前項で述べたような原子力による逆説的な「癒し」についての言説のかたちをとり、もう一方では、「正戦論」に基づく核兵器そのものの正当化というかたちをとった。

2011年8月4日の朝日新聞朝刊には「米空軍、核ミサイル発射担当将校にキリスト教で聖戦教育」と題された記事が掲載された。この記事は、バンデンバーグ空軍基地では同年7月に突然取りやめとなるまで20年以上にわたり、核ミサイル発射を担当する将校に対して行われる訓練プログラムの初期課程において、従軍牧師が聖書を引用しつつ「核の倫理」と題する講義を行い続けてきたことを報じている。聖書を用いた核の正当化を憂慮した複数の軍関係者から、NPO「軍における信仰の自由財団」へと通報が行われ、事態が明るみに出たというのである。

“Truthout”というインターネットメディアが入手したとされる資料によれば²⁸、従軍牧師である Shin Soh 大尉なる人物が用いた研修資料では、アウグスチヌスの正戦論が「正しい理由」(just cause)と「正しい意図」(just intent)に単純化して紹介され、旧約および新約聖書の様々な事例が引用された後に、広島への原爆投下による甚大な物的および人的被害にも触れられている。しかしすぐさま、この被害は他の莫大な米日の人的被害の一部に過ぎないと説明され、日独が先に原爆開発に成功していた場合には、躊躇なく使用したであろうと述べられる。さらには、ナチス・ドイツにおいてロケット兵器 V2 の開発に携わり、戦後はアメリカに投降して宇宙開発や大陸間弾道弾の基礎となるロケット研究に携わったヴェルナー・フォン・ブラウンが「聖書に導かれた民に降伏してこの兵器を引き渡すことでしか、世界の安全を保障し得ないと考えた」と述べたことが示された後、締めくくりにおいて、核兵器運用将校として、必要ときに躊躇なく正しい決断ができるよう備えるべきであるという勧めとともに、迷ったときに支えとなるように Shin Soh 大尉の連絡先や、基地内のキリスト教、ユダヤ教、イスラム教の相談窓口が紹介されている。

この驚くべき研修内容を明るみに出した30人規模の内部告発者のうち多数は、プロテスタントまたはカトリックの信者であり、信仰的な良心に従って告発を行ったことを Truthout は伝えている。

5) 原爆という「恩寵」

さて、被爆地ナガサキにおいてもまた、「癒し」をもたらしたのはキリスト教的言説であった。

長崎大学の医師であり、爆心直下となった浦上天主堂に属するカトリック信者であった永井隆博士は、原爆投下後に精力的に救援活動を行い、その後は病床に伏せつつ作家として活動し、長崎の多くの被爆者の心の支えを生み出し続けた人物として知られている。

1945年11月23日に行われた原子爆弾合同葬での弔辞の中で永井は「世界大戦という人類の罪惡の償いとして日本唯一の聖地浦上が犠牲の祭壇に屠られた燃やされるべき潔き羔として選ばれたのではないのでしょうか?」と述べている。以後、永井の著作に一貫して現れるこの思想は、一方では原爆投下という悲劇が天罰であるという言葉をしばしば投げつけられ苦しむことのあった浦上のカトリック信者たち²⁹に、慰めや希望を与えるものであった。

しかし他方、永井の思想は、原爆投下の責任(投下したアメリカの責任および投下を招いた日本の責任)を覆い隠し、悲劇を徒に美化してしまう危険をはらんだ思想であることが指摘されている。高橋眞司は、永井の思想を「浦上燔祭説」と名付けて批判した³⁰。他にも、古くは山田かん³¹、近年では高橋哲哉ら³²によって、永井批判がなされているが、小西哲郎は「浦上こそ神に特別に愛された場所である」という、カトリック信仰に基づいて差別を逆手にとった永井の思想を「浦上イズム」と名付け、その問題性を明らかにしようと試みている³³。

高橋眞司らの永井批判に対して、片岡千鶴子は「神の摂理という永井の言葉を、信仰の言葉ではなく、政治的な意味合いに曲解した上で」の批判でしかない、と反論を試みている³⁴。また、長崎市長をつとめ、自身もカトリック信者である本島等は、伊藤明彦³⁵が記録にとどめた被爆体験記の中で、深堀勝という男性が被爆当日、一家全員を原爆によって失ったことを知って思わず口にした「主与え、主取り給うなり。主の御名は賛美せられよ」という、旧約聖書のヨブ記に基づく信仰者としての告白に出会ったことが与えた洞察として、「永井隆は『原爆は神の御摂理』」と言い、現在まで批判にさらされている。私はこの『原子野の「ヨブ記」』を読んで初めて、永井批判はカトリックが持とうとするヨブの心持に対する外部の無知に起因しているのではと思ひ至った³⁶と述べている。また岡本洋之³⁷は、永井の思想をキリシタン差別というケガレ意識からの解放と位置付けて理解すべきであり、すなわちケガ

レ意識という日本社会に通底する根本問題との関わりにおいて考察が試みられる必要があると指摘している。

永井の思想については、管見の限りでもこのように様々な評価が見出された。今後なお議論が待たれるところである。

6) 「人間が神に加えた火刑」

広島と長崎は、時に原爆投下に対する姿勢について「怒りのヒロシマ、祈りのナガサキ」と称されることがある。「祈りのナガサキ」を導いたのが永井隆であるとすれば、「怒りのヒロシマ」を象徴するものの一つとしては、次の詩を挙げることができよう。

ちちをかえせ ははをかえせ
としよりをかえせ
こどもをかえせ
わたしをかえせ わたしにつながる
にんげんをかえせ
にんげんの にんげんのよのあるかぎり
くずれぬへいわをへいわをかえせ

(『原爆詩集』序)

これは、原爆詩人として知られる峠三吉が、1951年に刊行した『原爆詩集』の「序」として記され、彼の代表作として広く知られる詩である。この詩には、一瞬にして人々を焼きつくし、「わたし」も「わたしにつながる」人々さえも地上から消し去った原子爆弾と、その投下をもたらした者への怒りが刻まれている。そして、ここに表現されているのは、ただ1945年8月6日の出来事への怒りのみならず、朝鮮戦争における原爆使用の可能性をトルーマン大統領が口にしたこと、そのようにして核軍備が広がりつつあることへの怒りと危機感なのである³⁸。

しかし、この詩のことばに対して、前述の本島等は、次のように批判する。「原爆の惨害は多く語られている。しかし原爆投下の原因は語られることは少ない。私はここでそれを語らなければならない。広島は戦争の加害者であった。そうして被害者になったということを。〔中略〕峠三吉よ、この言葉は親を皆殺しにされた中国華北の孤児たちの言葉だったのではないか。広島に原爆を落としたのは『三光作戦』の生き残りだったのではないか。」³⁹

本島の批判や、栗原貞子の『ヒロシマというとき』が問いかけるように、原爆投下の背景としての戦争における日本の加害性を忘却あるいは捨象して、原爆投下の被害の側面やその悲劇性のみを強調することには問題があるろう。しかし、峠の叫びに向かって口をつぐめというのは、結局は原爆投下という人道に対する罪を黙認し、免罪することでしかないのではないか。戦争の罪責も、戦禍による被害者も、相殺することはできないがゆえに、戦争責任の告白と戦争責任の告発は両立しうる、いや、しなければならないはずである。

峠三吉は、1917年に広島に生まれ、1935年ころ発病した結核がもとで病弱となり、1953年に肺葉摘出手術中に死去している。姉の影響により、1942年、25歳の時に洗礼を受け、クリスチャンとなっている。1945年、28歳で被爆し、戦後は1949年、32歳の時に日本共産党に入党している。この際には日本共産党は『赤旗』紙で峠の入党を全国的に報じている。

峠が生涯を通じてクリスチャンとしての信仰を全うしたか否かについては、異なる解釈がある。生前の峠と親交を保ち、その生涯を一冊の本に記した増岡敏和は、次のように述べている。「かれは生涯この信仰を棄てなかった。このころかれと誠実にまじわり、キリストのおしえをおしえた田頭牧師やゾルゲ神父への敬愛の念がかれの胸ふかく蔵されていたからでもあろう。そして日本共産党に入党したあとは、赤岩栄牧師にならってその生き方を自らにも求める。つまり『変革の事業』に労働者階級の立場にたって加担し、科学的な真理をまよりひろめ、労働者階級の解放をめざしながら、それに信仰の自由を添えてゆき、そこで一個の精神の平安を祈ろうとしたのである。」⁴⁰

峠の日記には、1946年7月に「クリスチャンなれば、他の為に死ぬるが仕事」という言葉が見いだされ、また、1947年5月には「夕陽祈禱会」なる集会に出席したことが記されている。しかし、私生活に関わるのが原因で、

信者や牧師との間に距離が生じ、峠は徐々に教会から遠ざかっていった様子が、1948年に発表された短編私小説『鏡占い』に伺われる。しかし、増岡によれば、峠の思想的転機の一つは小説『遠雷』（1946年）に見出されるという⁴¹。死の床にある共産党員、木元と、その死をみとるクリスチャン青年田中の対話を主軸とした小説には、峠自信を投影したかのような田中が、キリスト教の理想と共産主義の理想を心中で徐々に重ね合わせていく様子が描かれている。そして、小説の結末は亡くなった木元の代わりに、田中がメーデーの集会に参加する場面で結ばれる。その後、峠の1949年12月9日の日記には、「一度手袋を投げた神だが本当に祈りたいような気がする。手術を受ける時はなおさらだろう。無理に気張る必要はないが、唯物論者として恥ずかしくないような、理性的意思と科学的確信による万全の見通しのもとに手術を受け、同志と民衆が私を必要とする責任と歓びの中に帰って行きたい」と記されており、この記述から「すでにこの時点で、三吉はクリスチャンとしてではなく共産党員としての確固たるものがある。三吉は『信仰を捨てた』と述べてはいないが、捨てている」⁴²と見ることも可能であろう。峠のキリスト教信仰と共産党員としての思想の関係については、なお研究の余地があると考えられるが、いずれにせよ、彼の詩作において「神」は、しばしば重要なモチーフとして登場する。

原爆投下と敗戦の翌年である1946年になって、峠は初めて詩の中に「原爆」という言葉を用いる⁴³。

焼跡の町に夜の雨は優しく霧をながす

クリスマスの調べは神話のように心にとまる
少女とわたしは焼跡の電車を黙って歩く

戦後最初のクリスマスは焼け焦げた臭いの中にひそやかで
神は戦争の悲しみの奥でお菓子のように美しい
少女とわたしは泥濘の上を軽わぎ師のように渡る

渡ってゆく原爆の廃墟は闇の中で無数にささやく
神と戦争について様々な不協和音をささやく
少女とわたしは然し黙って鉄を踏み材木をまたぐ

通過して来たクリスマスの雰囲気は霧雨よりも優しく
生き残った青春は風にゆらぐ樹木のように重い
この重さに耐えて少女とわたしは歩く

神があってもなくても少女とわたしは歩きつづける
（『クリスマスの帰りみちに』）

この時点では前述のように、峠はいまだ教会との交わりを保ち、キリスト教信仰において確かなものを持っているはずであるが、この詩においては信仰的な懷疑が前面に表れている。「戦争、原爆に『生き残った青春』の『重さに耐えて』歩きつづけるちからの象徴を、かれは少女にあたえている。やさしさの象徴としての少女が生きてゆくのを確認することなしには、もはや『正義』とか『善良なるもの』の存在を信じまいとしている。これまでふかく帰依してきた神さえもかれは疑うようになっている」⁴⁴のである。

「生き残った」というサヴァイヴァーズ・ギルトを重たく背負う者にとっては、クリスマスの福音は、「心にとまる」希望でありつつも、同時に「戦争の悲しみの奥でお菓子のように美しい」作り物めいてよそよそしいものとしか受け止められないのである。神がいるならなぜ戦争や原爆投下が起こるのか、という神義論的な問いを、峠は廃墟の闇のなかから響く、喪われた者たちのささやきの哀しい「不協和音」と表現している。

『原爆詩集』の「序」は、この無数の不協和音を丁寧に聞き取り、撚り合わせた声といえよう。そして、その声

は同詩集刊行時の世界状況（本稿執筆時にも何ら改善はされておらず、かえって悪化さえしている）に向けた怒りの声でもあることは、先に述べたとおりである。この詩集に収められた『炎』という詩には、核時代の終末的状況の幕開けとなった原爆投下とは、「人間が神に加えた、確かな火刑」である、という刺激的な一節がある。

1945、Aug、6
まひるの中の真夜
人間が神に加えた
たしかな火刑。
この一夜
ひろしまの火光は
人類の寢床に映り
歴史はやがて
すべての神に似るものを
待ち伏せる。
(『炎』一部抜粋)

原爆投下とは、人間が、神の似像である人間から、すべての正義や善良なるものをはぎ取ってしまった行為であり、すなわち人間が創造者である神に向かって加えた「火刑」だというのである。神が人間に加えた天罰でもなければ、人間が平和のための犠牲として「燔祭」に捧げられたのでもない、すべての善きもの、そして人間の尊厳が、人間自身の手により、燃やし尽くされてしまうことにほかならない、というのである。

7) 良心の「立ち入り禁止区域」

原爆投下によってはぎとられた人間の尊厳を、神の前に責任ある主体として立つことによって取り戻そうと営み続けたのは、牧師、教育者、平和運動家であった宗藤尚三である。宗藤は、1927年に広島で生まれ、広島工業専門学校（現広島大工学部）1年に在学中、爆心地から1.3キロメートルの自宅で被爆、倒壊した家屋の下敷きになり、重傷を負った。治療のため運ばれた似島の救護所は1万人以上の負傷者であふれ、「人間が粗大ごみのように捨てられる様子は地獄絵図さながら。おかしくなりそうで、無感情の状態に陥った」⁴⁵という。その後、学校を中退し、東京神学大学に一期生として入学、サンフランシスコ神学大学大学院卒の後、日本基督教団金城教会、阿佐ヶ谷東教会、広島府中教会牧師を歴任、1999年引退するも、その後も広島宗教者九条の会代表世話人、日本宗教者平和協議会常任理事、「サヨナラ原発広島の会」運営委員長など、反核・平和運動に身をささげた。2016年10月30日に惜しまれつつ89歳でその生涯を閉じた。

宗藤は自存自衛という理由において核兵器保持を正当化する論理である「核抑止力」論に対しては、「国家テロ」そのものであると厳しく指弾している⁴⁶。また、原子力発電については、故障やテロなどの危険、使用済み核燃料の最終処分の未解決、運用自体が必然的に生み出す被曝が、人間を含む地球上の全生命という神の被造物を危機にさらしていることを自覚すべきである、と述べている⁴⁷。

宗藤はさらに、チェルノブイリやフクシマの事故によって示された通り、「我々にいま要求されていることは、絶対的かつ長期的にみれば、単なる人間としての『世直し』の倫理的行動ではなく、あらゆる生命体を守るための『生きもの』としての倫理的行動である」⁴⁸はずなのに、それらの重大な事故を経てなお国家安全保障や経済的繁栄といった目的こそが至上命題であるかのような風潮が蔓延していくことにより、我々自身の心の中に核兵器や原発を正当化する「良心の立ち入り禁止区域」が巧妙に形成されつつあるのではないかと問いかけている⁴⁹。

この状況下にあって、我々がとるべき姿勢は「いかなる然りも含まぬ否」であるはずだ、と宗藤は指摘する。この言葉はもともと、1980年代にNATOがソ連に向けて、中距離弾道ミサイル配備を断行し、核戦争の危機が高まった際に、オランダおよびドイツの改革派教会が出した声明に含まれていた言葉である。ドイツで主流を占めるドイツ福音主義教会は「どちらにも偏らない平均性」という言葉を用い、中立主義の立場をとったのに対し、オランダと

ドイツの改革派教会は核兵器への反対は「アディアフォラ」（自由裁量）⁵⁰の問題ではなく、イエス・キリストに信従するか否かの「信仰告白の問題」であることを宣言したのである⁵¹。

ここで、かつて宗藤自身が被爆者として、また牧師として、教会の礼拝の講壇に立って述べた言葉を引用したい。

「私たち現代人は核時代に生きています。核時代では、あるいは地域紛争のようなものはあっても、もはや戦争を正当化しうるいかなる『大義名分』も存在しないことを確認しなくてはなりません。私は日本はGDP世界第三位と言う経済大国であるというようなことを誇るのではなく、世界の唯一の被爆国として、また戦争放棄を宣言した平和憲法を持つ国として、世界から尊敬され、信頼される平和を創り出す国になることこそ、私たちキリスト者の歩むべき道であることを信じます。」

（日本基督教団広島教会 2011年8月 平和聖日説教「光の天使を偽装する悪霊」⁵²）

4. まとめ 自己正当化の拒否～「善いサマリア人のたとえ」（ルカ 10：25-37）から

前項で概観したように、キリスト教は広島と長崎への原爆投下に対して、核兵器による武装について、そして原子力発電について、様々な立場をとってきた。その中には、原爆投下の罪責告白と、原爆投下容認論のように、互いに矛盾する言説も含まれている。また、原子力発電所建設こそが被爆の悲劇を乗り越えるために益するキリスト教的隣人愛の表現だ、という言説もあれば、神が創造した世界において「原子力と人間は共存できない」という主張も見いだされる。このいずれを是とすべきか、ここではやや踏み込んで、聖書解釈に基づく一つの提言を試みてみたい。

ルカ福音書 10：25-37 に記された論争は、ある律法の専門家が、イエスを陥れようと、「何をなすことで私は永遠の生命を受け継ぐことができるか」と問うところから始まる。イエスは彼に「律法には何と書いてあるか、あなたは〔それを〕どう〔解釈して〕読むか」と尋ね返し、彼は神を愛し、隣人を自分を愛するように愛するという原則を正しく答える。イエスは彼に「あなたは正しく答えた。これを成せ、〔そうすることによって〕あなたは生きる」と促す。律法学者は「では私の隣人とは誰か」と質問を返す。注目したいのは、ルカによる福音書がここで、この質問はこの律法学者が自分自身を正当化するためにした質問であると述べていることである。この質問は、隣人とそうではない者が存在するという発想に基づいており、そのように「隣人」の範囲を定めた場合に、「隣人」愛を実現し得ているという自負があったであろうことを、「正当化」という動機の存在が示している。

イエスは彼のこの問いに対し、あるたとえ話をもって答える。強盗に襲われ道端に倒れていた重傷者を、聖職者たちは見捨て、しかしサマリア人に属する通りがかりの人物が助けた、という話である。サマリア人とは、イエスや律法学者たちが属し、おそらくたとえ話のけが人もそう前提されているであろうユダヤ人とは反目し合う関係にあったとされている民族である。この話を語り終えた後、イエスは「では、これらの三人の中の誰が、強盗たち〔の手〕に落ちた人の隣人になったと、あなたには思われるか」と、律法学者に問う。ここに驚くべき発想の転換が示されている。「隣人」とは「である」と定めることができるものではなく、「なる」ものなのだ、というのである。

誰かが自分の「隣人である」と固定しようとする発想は、「隣人でない」存在を生み出すことに直結する。そのように隣人と非-隣人とを区別するところに差別や敵意が生まれる。すなわち、隣人を限定しようとする「隣人」愛こそが戦争や差別を生み出すといってよいのではないか。

前項において概観した、核をめぐるキリスト教の言説の中には、安全保障や経済的繁栄などを「正当化」しようとする（あるいは少なくともそのような目的と密接にかかわった）ものが含まれていた。また、隣人と非-隣人を区別する発想に基づくものが含まれていた。

しかし、「善いサマリア人のたとえ」（ルカ 10：25-37）は、我々に、隣人の地平を無限定に広げていこうとするような隣人愛⁵³こそが、互いの尊厳に向ける深い敬意や、平和を生み出し、「生きる」者となることを示している。核時代におけるいかなるキリスト教倫理も、「隣人」愛という自己正当化の動機についての自己批判なしには成立し得ないのである。

- ¹ 本論文は、日本基督教学会第64回学術大会シンポジウムでの発題、「『被爆地ヒロシマ』から」をもとにしている。本文内での〔 〕は筆者による補足を表す。本論文内で言及する聖書本文は私訳を用いている。
- ² このうち、芳名録の記帳や、小学生代表との会談に要した時間を除けば、展示自体を見学したのは約5分ほどであったと考えられる。
- ³ 「田中熙巳(てるみ)・事務局長(84)は総会後の会見で、『オバマ氏の資料館見学や被爆者との会話は短時間で、人間が変わるような内容ではなかった。改めて来てほしい』と語った」(『オバマ氏広島訪問「不十分」被団協、再訪求める方針』、朝日新聞、2016年6月17日付)。
- ⁴ 広島平和記念資料館はその設置条例の第1条に「原子爆弾による被害の実相をあらゆる国々の人々に伝え、ヒロシマの心である核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に寄与する」ことを目的として謳っているが、広島市が2010年に策定した「広島平和記念資料館展示整備等基本計画」に基づき2018年度の完成を目指して進めている展示のリニューアルは、4つのテーマに展示を整理し、その中でも「被爆の実相」をテーマとした展示を中心に据えた構成とするものである。ここでの「被爆の実相」は、客観的事実の提示と、被爆証言に代表される主観的な体験の提示の双方によって、示されるものと捉えられている。
- 「本館の『被爆の実相』展示は、原爆の非人道性、被害の甚大さや凄惨さ、被爆者や家族の苦しみ、悲しみなどをこれまで以上に伝えることとしています。展示は、大きく『8月6日のヒロシマ』と『被爆者』の2つのゾーンに分かれます。『8月6日のヒロシマ』のゾーンでは、原爆の熱線、爆風、放射線が複雑に絡み合い都市と人に大きな被害を及ぼしたことを伝えます。一瞬にして壊滅した都市の中で多くの生命が失われたことを示すため、破壊されたレンガ壁など大型の被爆資料と亡くなった人たちが着用していた衣服、遺体や火傷を負った人たちを撮影した写真など、より多くの資料を合わせて、当時の凄惨な状況がイメージできる集合展示を行います。『被爆者』のゾーンでは『人』に主眼しゅがんと置き、遺品と合わせて遺影や詳しい被爆状況、寄贈者の思いを展示し、一人一人の命の存在や遺族の悲しみなどを伝えます。また、健康被害や心の傷など今日まで続く原爆被害の実態を、被爆者の体験記も活用しながら展示します」(公益財団法人広島平和文化センターニュースレター『平和文化』No.183、2013年7月号)。
- ⁵ アーサー・ビナード、『NHK 視点・論点「ピカドンの日」』、2013年8月5日放映。
- ⁶ 前掲資料。
- ⁷ 広島市は「被爆都市として世界恒久平和の実現をめざす都市であることを示す」呼称であるとしている。広島市役所ホームページ『どうしてヒロシマとカタカナで書くのですか?』参照(http://www.pcf.city.hiroshima.jp/kids/KPSH_J/shitsumon/shitsumon18.html)。
- ⁸ <http://hiroshima-letters.net/index.html>
- ⁹ 「カタカナで表記されるとき、もしくはローマ字表記のHIROSHIMAとNAGASAKIで綴られるとき、二つの街は国境を超え、人類史のスケールでの歴史を背負う」(重松清「カタカナの街」、『No Nukes ヒロシマナガサキフクシマ』、講談社、2015年)。とはいえ、当然ながら、固定された定義が存在するわけではなく、「カタカナの『ヒロシマ』にこめられている様々な思いは、常に同じというわけではなく、複数の語りが存在していた」(福岡良明、吉村和真、山口誠編著『複数のヒロシマ』、青弓社、2012年)。
- ¹⁰ 「原爆投下の背景」、『中国新聞ヒロシマ平和メディアセンター』用語集、<http://www.hiroshimapeacemedia.jp/>。
- ¹¹ 清水章宏・橋本和正著、広島県労働者学習協議会編『軍都広島「広島」と「ヒロシマ」を考える』、一粒の麦社、2011年、68頁。
- ¹² 詩人・栗原貞子は「ヒロシマというとき」という作品において、加害の側面を忘却あるいは捨象して、カタカナの「ヒロシマ」として被爆の悲劇性や平和へのメッセージを語ることの欺瞞を鋭く指摘している。
- ¹³ 創世記1:19-20 参照。
- ¹⁴ 石川明人著『戦場の宗教、軍人の信仰』、八千代出版、2013年、38頁。

- ¹⁵ ダウニーは、エノラ・ゲイが戦争を終結に至らせる特別な任務を負っていたことを知っていたようである。ザベルカは大規模な殺戮に帰結する爆撃任務であると理解していたようであるが、他の爆撃任務と異なる性質のものと認識していたかについては今後の調査の課題としたい。両者とも戦後は自身と国家の過ちを告白し、非暴力を訴えた。
- ¹⁶ Harry S. Truman Library & Museum, http://www.trumanlibrary.org/whistlestop/study_collections/bomb/large/documents/index.php
- ¹⁷ <http://www.pewresearch.org/fact-tank/2015/08/04/70-years-after-hiroshima-opinions-have-shifted-on-use-of-atomic-bomb/>
- ¹⁸ 木村朗・高橋博子著『核の戦後史 Q&A で学ぶ原爆・原発・被ばくの真実』、創元社、2016 年、39-56 頁。
- ¹⁹ “Radio Report to the American People on the Potsdam Conference”, Harry S. Truman Library & Museum, <http://www.trumanlibrary.org/publicpapers/?pid=104>.
- ²⁰ 「トルーマン元大統領と世界平和研究使節団親善大使の松本卓夫博士との会談記録（トルーマン図書館講堂にて1964年5月5日）」、毎日新聞、<http://mainichi.jp/articles/20150805/mog/00m/040/001000c>。
- ²¹ 戦後のアメリカのキリスト教会における原爆投下への反応については、栗林輝夫『原子爆弾とキリスト教』、日本キリスト教団出版局、2008 年に詳しい。1945 年 8 月 15 日に『クリスチャン・センチュリー』誌が原爆投下に道義的・信仰的に反対する投書で大規模にとりあげたケースや、米国キリスト教連合協議会による答申（1946 年 3 月）における、原爆投下は無差別殺戮であり、その罪責を認め、日本に謝罪すべきであるという指摘など、いくつかの目立った例外はあるものの、原爆投下を容認する見解がやはり多数を占め、また、冷戦に向かう中でキリスト教会も原爆の使用を正当化する風潮に飲み込まれていったことを、栗林は指摘している。
- ²² Peter Kuznick, “Japan's nuclear history in perspective: Eisenhower and atoms for war and peace”, Bulletin of the Atomic Scientists, <http://thebulletin.org/japans-nuclear-history-perspective-eisenhower-and-atoms-war-and-peace>.
- ²³ 広島市立大平和研究所教授、田中利幸による講演の記録より (http://peacephilosophy.blogspot.jp/2012/04/blog-post_08.html 参照)。
- ²⁴ 当時の浜井信三市長はこの計画に対し「(原爆) 犠牲者への慰霊にもなる」と歓迎のコメントを残しているという (<http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=28372> 参照)。
- ²⁵ マレーやイエーツの発言を、単なる大義名分と見ることも可能であるが、少なくとも、そのような大義名分が受け入れられる状況があったといえよう。
- ²⁶ 『全面改装へ、原爆資料館 60 年の歩み時代を映す展示変遷』、毎日新聞、2015 年 12 月 9 日付 (<http://mainichi.jp/articles/20151209/ddf/012/040/003000c>)。
- ²⁷ 「原子力の平和利用」の日本における推進については、アメリカ大使館や CIA が関与し、日本の新聞やテレビなどのメディアによる宣伝、アメリカからの使節団来訪、そして「原子力平和利用博覧会」の全国展開などが行われたことが指摘されている (Kuznick, 前掲資料)。この一連の動きを象徴する発言としては、次のものが挙げられる。「日本には昔から“毒は毒をもって制する”という諺がある。原子力はもろ刃の剣だ。原爆反対を潰すには、原子力の平和利用を大々的に謳いあげ、それによって、偉大な産業革命の明日に希望を与える他はない」(柴田秀利『戦後マスコミ回遊記』、中央公論社、1985 年)。
- ²⁸ "Jesus Loves Nukes": Air Force Cites New Testament, Ex-Nazi, to Train Officers on Ethics of Launching Nuclear Weapons", Truthout, <http://www.truth-out.org/news/item/2356:jesus-loves-nukes-air-force-cites-new-testament-exnazi-to-train-officers-on-ethics-of-launching-nuclear-weapons>.
- ²⁹ 「『原爆は長崎に落ちたのではない。浦上に落ちたのだ』という考えかたが、長崎には根づよくある」(高山文彦著『生き抜け、その日のために長崎の被差別部落とキリシタン』、解放出版社、2016 年) というように、浦上は差別の対象とされた地域であり、浦上のカトリック信者が神社参拝を拒んだ非国民として天罰を受けたという差別的な理解も、しばしば臆面もなく口にされたと思われる。「日本二十六聖人」処刑の地であり、長崎駅にほど近い西坂という地について、斎藤茂吉は「西坂を伴天連不浄の地といひて言継ぎにけり悲しくも

あるか」(斎藤茂吉『歌集つゆじも』、岩波書店、1946 年、37 頁)という短歌を詠んでいるが、このような差別は今でも残っているという(土門稔『分断差別の歴史を超えて和解へ「生き抜け、その日のために長崎の被差別部落とキリシタン」(1)』、Christian Today、2016 年 5 月 12 日、<http://www.christiantoday.co.jp/articles/20857/20160512/ikinuke-sonohinotameni.htm>)。

30 高橋眞司『長崎にあって哲学する―核時代の死と生―』、北樹出版、1994 年。

31 山田かん『長崎原爆・論集』、本多企画、2001 年。初出は「偽善者・永井隆への告発」として、『潮』誌第 156 号(1972 年)。

32 高橋哲哉『犠牲のシステム福島・沖縄』集英社新書、2012 年、138-145 頁。

33 小西哲郎『原爆に関する永井隆の宗教思想についての一考察』、『長崎外大論叢』第 13 号、長崎外語大学、2009 年、53-66 頁。

34 『ナガサキの思想と永井隆―没後 50 回目の夏に―(3) 信徒への励ましと目的』、長崎新聞、2000 年 8 月 3 日付(<http://www.nagasaki-np.co.jp/peace/2000/kikaku/nagai/nagai3.html> 参照)。

35 伊藤明彦『原子野の「ヨブ記」―かつて戦争があった―』、径書房、1993 年。

36 平野伸人編・監修『本島等の思想』、長崎新聞社、2012 年、215-216 頁。本島の永井理解については、菅原潤「『ナガサキ』から『フクシマ』へ―本島等による『浦上燔祭説』の解釈をめぐる一考察―」、『長崎大学総合環境研究』17 号 1 巻、長崎大学、2014 年、19-30 頁参照。

37 岡本洋之「永井隆はなぜ原爆死が神の摂理だと強調したのか?―『ケガレ』から考える試み」、『教育科学セミナー』42 号、関西大学教育学会、2011 年、1-13 頁。

38 増岡敏和『八月の詩人原爆詩人・峠三吉の詩と生涯』、東邦出版社、1970 年、315 頁。

39 本島等「広島よ、おごるなかれ―原爆ドームの世界遺産化に思う」、『平和教育研究年報』第 24 号、広島平和教育研究所、1997 年。

40 増岡、前掲書、52 頁。

41 同、192-195 頁。

42 松本滋恵『わたしのフィールドワーク原民喜と峠三吉』、2014 年、153 頁。

43 増岡、前掲書、87 頁。

44 同、89 頁。

45 『拝啓オバマ様 from ヒロシマ』、毎日新聞、2016 年 5 月 19 日付、<http://mainichi.jp/articles/20160519/ddl/k34/040/643000c>。

46 宗藤尚三『核時代における人間の責任―ヒロシマとアウシュビッツを心に刻むために―』、ヨベル社、2014 年、63 頁。

47 同、81-88 頁。

48 同、71 頁。

49 同、88-91 頁。

50 アディアフォラとは、「善でも、悪でもなく、命じられてもおらず、禁じられてもいけないこと」を指す、ストア派によって形成された概念である。

51 宗藤、前掲書、85 頁。

52 <http://www1a.biglobe.ne.jp/h-tk/shougen.html>

53 辻学、『隣人愛のはじまり』、新教出版社、2010 年によれば、(史的)イエスはむしろ隣人愛に否定的であり、むしろ隣人愛が抱える限界や矛盾を「愛敵」の要求によって批判的に浮き彫りにしようとしたのだという。辻は聖書の諸文書の中に、またキリスト教の思想的発展過程の中に、普遍的な「隣人愛」への指向と、狭量な「隣人」愛への指向が交錯していることを明らかにしている。